

新編  
小學  
讀本  
第一  
冊  
改訂  
正句

小學讀本第一

第一

凡地球上の人種

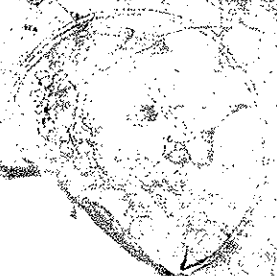
は五つに分きたり

亞細亞人種歐羅

巴人種馬來人種

亞米利加人種亞

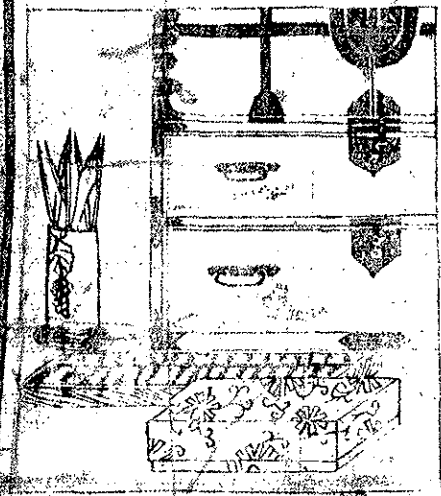
弗利加人種



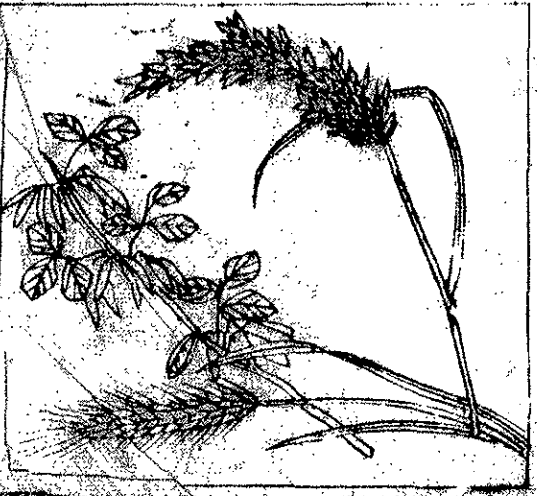
田中義廉  
那珂通高

編輯  
訂正

り日本人ハ亞細亞人種の中あり  
 人ハ賢まものと愚あるものをあはれ多く  
 と學ばざるものと由りてなり賢まものハ世々用  
 ぬられて愚あるものハ人は捨てらるること常  
 の道なきハ幼稚のときより能く學びて賢まも  
 のとなり必無用の人とある  
 ことあるべき  
 幼稚のときハ先日用什器の  
 名を記して其用ぬ方を知る  
 べし○筆ハ字を寫し文畫を



寫字具あり○算盤ハ物を數ふる用ハ併し○又  
 庫ハ書籍を納るる箱あり○箆笥ハ衣裳などを  
 入るる器あり  
 又平生食むべきものハ名を記しこれを調理  
 して食物となす法を知るべし  
 ○食物となすべきものハ種  
 々あり  
 第一ハ穀物あり○穀物とハ  
 稻麥豆粟黍の類をいふ○此  
 等ハ皆田畠を作りて其實を



取り或ハ炊ま或ハ炙りて食物と成るなり  
 第二ハ肉類あり○肉類トハ魚鳥獸肉の類をい  
 ふ○此等ハ或ハ炙り或ハ煮て食物と成るなり  
 第三ハ菓あり○菓ハ葡萄、梨、梅、桃、柿、橙、蜜柑の類  
 をいふ○此等ハ多く生よて  
 食し又鹽ヲ漬けて食物と成  
 るものあり

第四ハ菜蔬の類なり○此等  
 ハ自ら植ゑ作るものと野  
 自生あるものとあり○多く



ハ煮て食し又鹽漬と成るものあり○  
 と根とと食物トハ又實を食物と成るものあり  
 此ノ如ク平生用ゆる食物什器を能く心を留  
 めて忘るゝことあるべき  
 人の業ハ種々ありて其學ぶべきところ各異  
 なり然きども先書と讀み字を寫し物を數ふる  
 ことと學ぶを第一の務トハこれを普通の學と  
 いふ○この學を為さざれば何きの業と  
 こと能たば

六、七歳に至きば皆小學校に入りて

通の學は従ふべし。○小學校へは士農工商とも  
學ぶべきの業を授くる所あり。

學校に到りては何事も一心は師の教は順ひ勉  
強して學ぶべし。

何事と學ぶもの、勉強を第一とせ、勉強せざれば、  
學問は上達せざること能はず。

一事までも記し得たる所の花く心を用めて忘  
るべからず。

初より多く記せんとせきば却て忘るゝものな  
り、故に急ぎず、日毎に

ことごとく記し得たる所の事自處とす。お  
て多きは至るべし。

他人の一たび讀む所の百たびもこれを讀み他  
人の十たび習ふ所の千たびもこれを習ふべし。

○斯の如く勉強して怠りなければ必多く事  
記し得らるべきなり。○愚あるものも多し。

記し得るときは、無用の人たることを  
學校まで、授業の暇は遊歩の時間

間、遊歩場に出で、身を動か  
し、○怠なく、勉強したる者は遊歩

樂となるものなり、  
 故に遊歩を樂とせんとお  
 もたぐ、授業の時間の怠  
 く勉強まべし、

遊歩場を出て、男兒の戯  
 る、技の種々あきども決  
 して危き遊をなすべし、  
 しばし、輪を廻り、紙馬を

とせし球を投ぐる等と宜しとす。○朋友の  
 遊ぶべきの自擅中して他人の



らず、

女子の遊は男兒と異りて、  
 走り遊びあそびの戯をべし  
 あり、うらび、○朋友を伴  
 ひて遊ふ時の心を和らげ  
 て何事も親しくまべし、

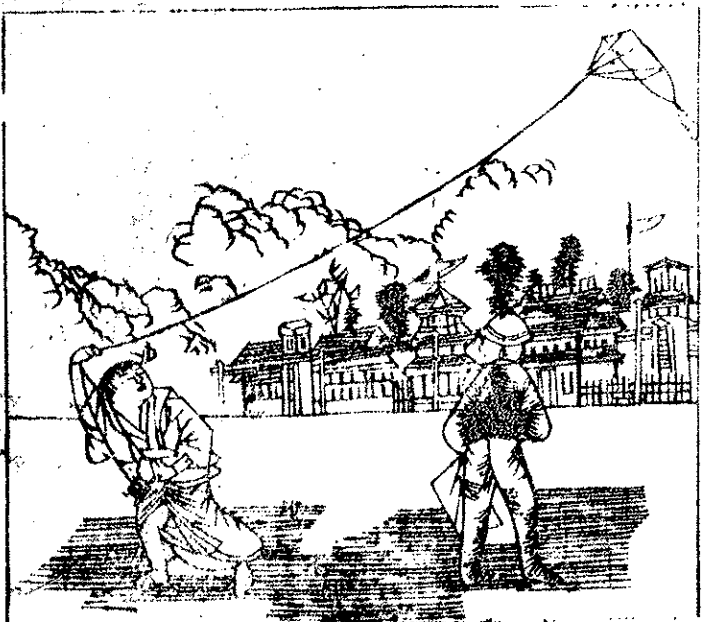


第二

我等ハ河の中まで遊ぐんとす、岸の遠ハ  
 ゆる水に入りて、遊ぶことを得べし、○河の  
 中の深きゆる、遊ぶべからば、若し深き



むとまの復出づること  
 能はざるべし。○汝が衣  
 裳は濡ひたきば陸の上  
 りてこれを乾まべし。○  
 汝はこの小舟に乗らん  
 とする。○小舟は覆へ  
 り易き故漫り乗るべか  
 らべし。○過つ時ハ水は  
 陥りて其命を失ふこと  
 あるべし。

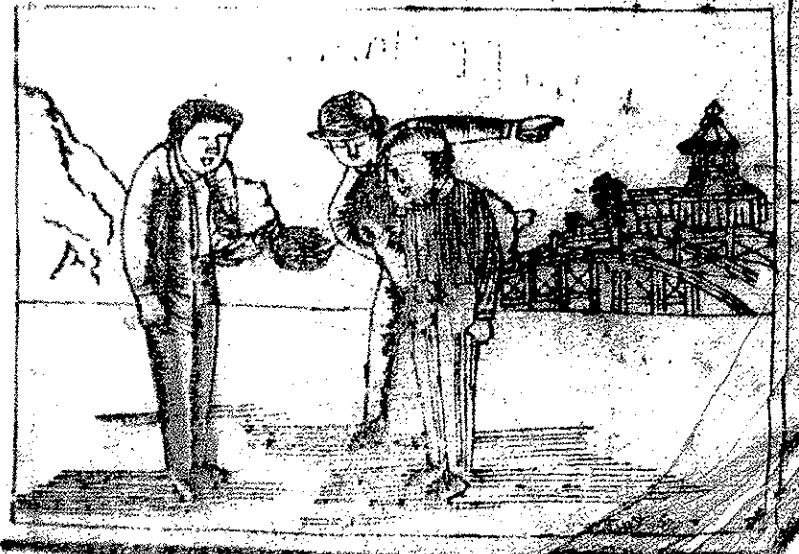


○其舊き帽は破きたるゆゑは新しく買得

此兒ハ新しき紙鳥を持てり。○彼が糸を掛つて

走るを見よ。○彼ハ紙鳥  
 を高く飛ばせんと思ふ  
 あり。○汝も紙鳥の颯々  
 を欲する。○紙鳥の颯々  
 したるとまの能く心を  
 用ふる。○糸の樹は纏ふ  
 ことあるべし。  
 彼ハ新しき帽を持て

あり。○新しき帽をば心を  
 用めて或は毀り或は濡す  
 べからば。○凡て新しき時  
 ころ大切は持てば後まで  
 も破る難。故は何物まで  
 も、麁末はあべからば若心  
 を用ぬまゝして毀つことな  
 らばその罪を免るべから  
 ば。



此猫を見よ。窓より臥床の上へ坐せり。とれは、  
 此猫を見よ。窓より臥床の上へ坐せり。とれは、

また所らひ。○汝は猫  
 を追ひ退くることを  
 得べし。○否乎と出  
 せば。○猫は他所へ追遣  
 るべきなり。又此所へ留  
 め置べきなり。○猫は此  
 室の中へ留め置と雖  
 臥床の上へ上ること  
 をば許さべからば。○汝は



たりや〇見たり夜間〇氣を捕ふること屢あり  
 汝ハ小舟ヲ乗進る人を見  
 たりや彼ハ何如よし其  
 舟を行るや〇彼ハ櫂を以  
 て小舟を漕げり  
 群兒相集り毬を投けて遊  
 び居きり〇彼等の棒を持  
 てるハ投げたる毬を受留  
 るを以て樂と爲るなり若  
 其毬を受留ること能はば



等の起き出づべき時の来るなりと思ふべし

る者さば負と爲るなり〇  
 此毬ハ柔よして堅きもの  
 多しゆらぶるゆゑ人の子は  
 ても傷くことあり〇此ハ  
 善き遊あれど熱き日は  
 ハ早くこれを止めよ酔  
 き熱さに觸るるとまは身  
 を害ふを以てなり  
 大陽の昇りたるときハ我



○大陽の昇りたる後までも猶寢所より臥せり  
 ちうき、○我等の大陽をバ見ることを得きども  
 其出づるを見ることなりト○  
 汝ハ大陽の赤きを見たるこ  
 とありや、大陽の赤きときハ  
 大抵早きものあり  
 これハ林檎の樹あり、○汝ハ  
 此樹の蕾を見たりや、○此樹  
 ハハ紅き蕾満てり、○此蕾を  
 バ取るバからバ、○驚過くれ

其蕾皆開き美き花  
 とあるのみならず後ハ  
 ハ實を結びて其味甘き  
 果となれバあり、  
 彼兒ハ此雞を養へり、○  
 雞ハ穀物を食ふること  
 速なり、○これ噛むこと  
 ちくして、吞むが故あり、  
 然きども喉の下に餌袋  
 といふものあり、吞み

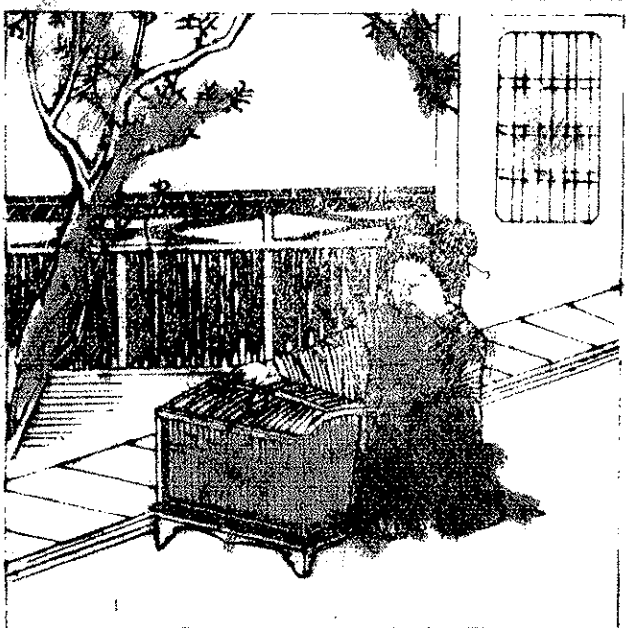




たる穀物は先づ此袋に入  
置、あつゝは暫く停まりて、そ  
れより漸く腹は入るもの  
なり

第三

彼女ハ鳥を捕へて籠に入き置けり○此鳥ハ馴  
きさりや又時と一てハ、噪き暴るゝことハあり



や○此鳥今ハ馴れたき  
ども、初をよよく暴きたり、  
○汝ハ鳥の聲を聞くこ  
とを好む、又好まざる  
ろ○吾ハ鳥の聲を聞く  
ことを好むのとあらば、  
又其形を見ることが好

めり、○此鳥ハ籠より出づること願へる、○  
若籠より出づるとも、再歸り来るべき、又其ま  
まに飛び去る、○凡て鳥ハ自由ハ山林ハ遊

ことを好む故に籠より出づることを願ひ一度  
出づべきに再歸り來ることなし。」

我も惡くも小兒を好まざ  
るゆゑこれを遠ざけんと  
す。○惡くも小兒までも吾  
へこれを打ち傷くること  
あり然きども共は遊ぶこ  
とをば好まざるあり

波子へ彼小女の為に親切ありや。○然り波子の  
親切あることハ小女の躓き倒きざる為に事と



執り導きて家には在ると同ドク安全ならむ  
ることあるを知りて、これを任せたるゆゑに親  
切に導きて家には在ると同ドク安全ならむ

執り導くと見ても知るべ  
し。○彼二人ハ道に迷ふべ  
きなり。○否、彼子ハ能く道を  
知るゆゑに二人とも道  
に迷ふことあり。○彼等ハ  
林の中を過ることを恐る  
るなり。○否、恐るることなし

○小女の母ハ波子のむる

あり○若又家より歸らんと  
まるとまきハ自在に歸り  
得らるべし

汝ハ杖を携へたる老人  
を見たるや○彼老人ハ  
路傍の石の上息ひ其  
手を杖の上置けり○

彼の顔と其白髪あるは由りて  
年老たるを知り  
又年老たるは由りて體の屈み  
たるを知り○  
何は由りて彼ハ杖を携ふるや○  
老人ハ杖の為



は歩行を杖なくしてハ歩行難し○  
彼ハ年老と  
きども起つことと歩行をることハ  
得べし然き



ども急を走ること能ハば時  
時途上ハ休みて息を續き杖  
を頼りて徐に歩行せらるる  
爰ハ五人あり○汝ハ此人の  
年老たるを知りや○此人  
ハ白き髪あきハ老人あるべ  
し○此人等ハ手ハ杖を持ち  
たる老人と、同トク年老たる



○然きども其身ハ猶壯健あるゆゑ杖ヲ頼ら  
ざして自在ニ歩行せることを得るなり



此笛ハ管長クして先の開きたるものゆゑ聲

彼等の持ちたる笛の名をハ  
何といふぞ○此ハ刺ハあり  
○彼等ハ祭隊の兵卒ゆゑマ  
此笛を吹くことを鍛錬せる  
あり○此笛ハ兵隊の行列を  
整ふる合圖ヲ用ゐ又ハ祝日  
の音楽ヲ用ゐるものあり○

を發すること最大なりハ  
汝ハ此人の服紗の中ニあ  
るものハ書冊なりと思ふ  
ハ○否これハ巻物なり○  
然らバ書冊の次第を數ふ  
るとき何故ハ巻二卷ニと  
云ふや○この唱ハ漸ク轉  
れるなり古ハ只巻物ニ  
て書冊あらざるゆゑハ卷  
一卷ニと呼びたり一を其後今の書冊出来りて





も猶昔の唱ふ浴ぐへるあり



良き老人ハ我ガ好ム隨ひて問ふ所と教へ又能く小兒を愛するなり○然り彼ハ小兒の善まるものを愛せれども悪くも小兒をバ決して愛まらることなし○善き小兒を愛ハ好きて何事とも教ふるあり

汝ハ此女子を見たるなり○何故も其手と上げてをるや○彼女子ハ籠り鳥を入き置きたれども

心を用ゐること深からず

る故も鳥を養ひ得ば彼籠

を持と即其鳥逃げ去りて

直も林の中へ飛び入りた

るなり○此とき驚きて手

を擧ぐども再捕ふること

能はざれば何の用も立

つべからば○彼の鳥を逃が

したるを吾ハ知て

甚喜べり鳥ハ自由あることを好むものなれ



あり



上よ遊ぶは天然の性なればこれを捕へて苦むるは善きことよあらば

鳥の木の在ることを好んで、巢を造り兒を養ふは、鷓鴣の小鳥よて棘の間、巢を營ふ、鴈鷓へ水鳥よて水の邊よ、巢を造るなり。かゝる鳥、頭よ毛冠あり、をべて諸鳥の林間又ハ水

第四

此女子の愛すべき人形を持てりこれ等の遊ぶ



は宜しき具あり必大切を弄ぶべし。人形を舞はばとき、静よ動りて毀るへから

母の小兒よ向ひて、何きの人形を求めんとするやと問ふよ、小兒は、自好む所を指し示せるなり。○此小兒は人形のみを弄ひて、倦めるとまよは、何事ぞなれば、○毬を弄ぶことを好むあるべし。



鳥の物遠く命

り、○此鳥の眼力甚強きゆゑ、晝  
間ハ却て物を見ること能はず、暗  
夜ハ明あること人の能く日中



○此店は列ねたる品は皆小  
兒の好むものなきども、此小  
兒ハ静ある娘ゆゑ、人形を  
愛して能く心をを用ゐ、これぞ  
損ひ毀ることなし

梟ハ終日、密樹の枝よをり、夜  
よ入き、始めて飛ひ翔るふ

物を見るが如し

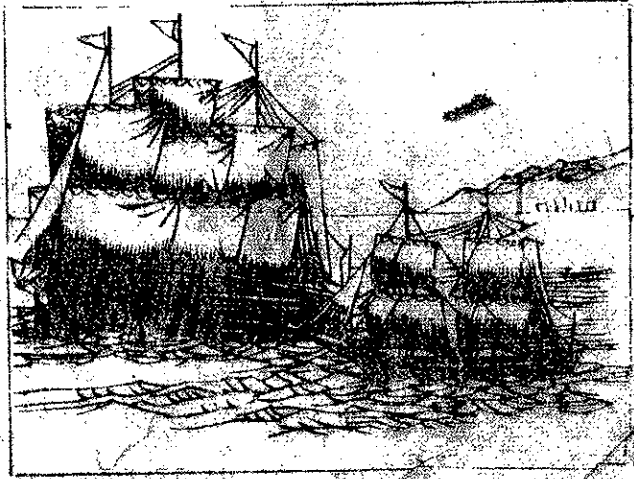
馬よ乗する人あり、○汝ハ馬よ乗ることと好む

久○我ハ馬よ乗ることとを  
好めり、然きども、彼の如く、  
疾く走ることを好まば、徐  
よ歩まざることと好めり

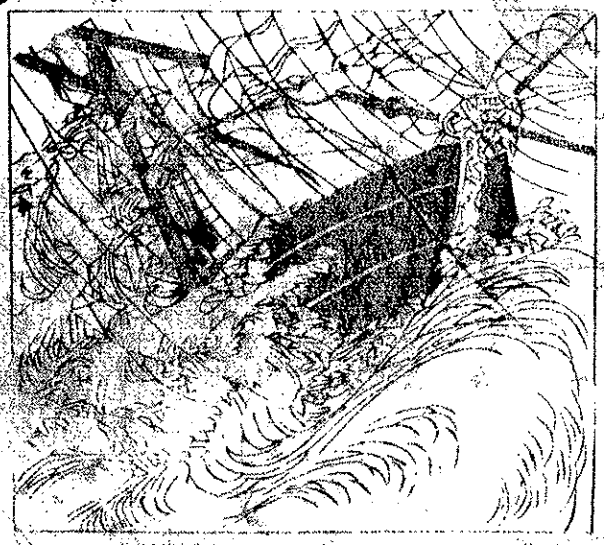
○此馬ハ何故ハ疾く走る  
や、○馬ハ彼よ鞭うたる  
ゆゑ、其痛ハ堪へずして、  
疾く走るなり



爰は、小船と大船あり、小船は二本の櫓あり、大  
 船は三本の櫓あり、汝の櫓  
 の用と、知きりや、○櫓へ凡て  
 帆と揚ぐる為、設けたるあ  
 り、○汝の海を渡るも、小船は  
 乗ることを好むり、○風吹ま  
 て、浪の立つ時、我を船に乗  
 りて、海を渡ることを、好まば  
 其覆らんことを、畏るゝゆゑなるか、○これハ蒸氣  
 船ありや、○否、蒸氣船は、何ら、帆前船なり、



爰は、暴風の日、海上は浮び  
 たる船あり、櫓も折き、帆も  
 破きて甚危き状あり、○此  
 船ハ帆前船なるべし、  
 蒸氣船なれば、斯る難も、罹  
 ること少おからん、○これ  
 ハ軍艦ありや、○否、商船な  
 り、船の腹は、炮門を、見て、知るべし、  
 此小免ハ、幼年なるゆゑ、水の深き所  
 と能え、○此小免ハ、何をなさんと、まき、○





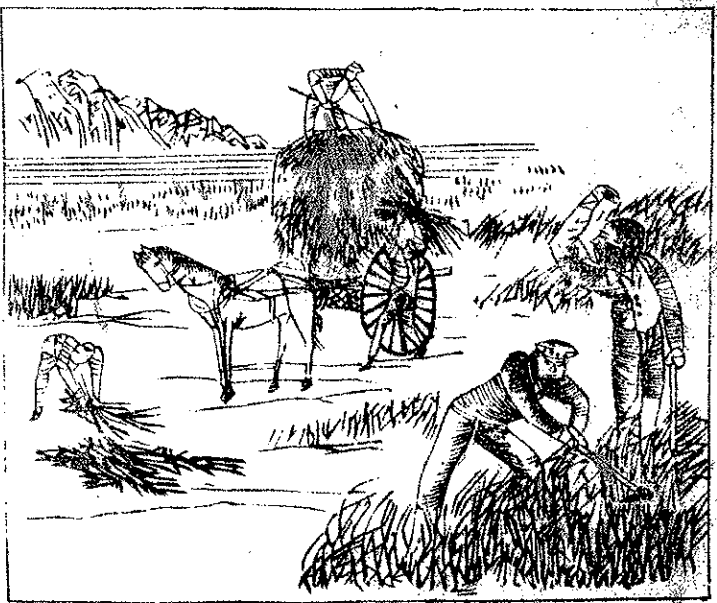


れは蓮の心も葉も  
 とを採らんとせり  
 一、岸より遠く離れ  
 まは水の漸深くなるに  
 歸ること能をさるべし  
 一人の男の帽を被りて左の  
 手は杖を持てり○此人は此  
 家の主人にて、今他所へ出で  
 て行かんとせり、状なり○帽を  
 手は持ちたる人  
 上著と著せりと肘を見せり、  
 これこの家

の僕もして事となはは便  
 るがゆゑあり○僕も主人  
 の出て行きて、後より終日空  
 しく暮れしことを欲せばして  
 其為さへし事を問ふところ  
 あり



人ありて草を積み上げたり  
 此草の乾きたると、枯草と云  
 ふ○枯草ハ車は載せし、これ  
 を馬は引かせ直  
 小屋は運の入る○草は枯きて  
 乾くを待ち速



ハ香を嗅ぎ、耳ハ聲を聞き、口ハ食と味ひ又思ふ  
 ことき言ひ目ハ物を見るものなり○鼻ハ口と

小屋を運び入るべし  
 雨も遇ふ時ハ再清  
 るものなきハなす○此  
 枯草ハ半馬の食とみ  
 べし○馬ハ枯草と麥と  
 を食されども其最好む  
 ものハ麥なり○  
 人ハ耳目口鼻はりの鼻



○又人ハ二つの手と二つの足とあきども口  
 ハ只一つもあき話をハ少くして業をハ多くまへ

ハ只一つもして目と耳  
 とハ二つあり○耳と目  
 とハ二つありて口ハ一  
 つなきハ見聞く如く又  
 言語を多くまへからハ

第五

鶴ハ大なる鳥もして籬の間ハ其羽毛茶色

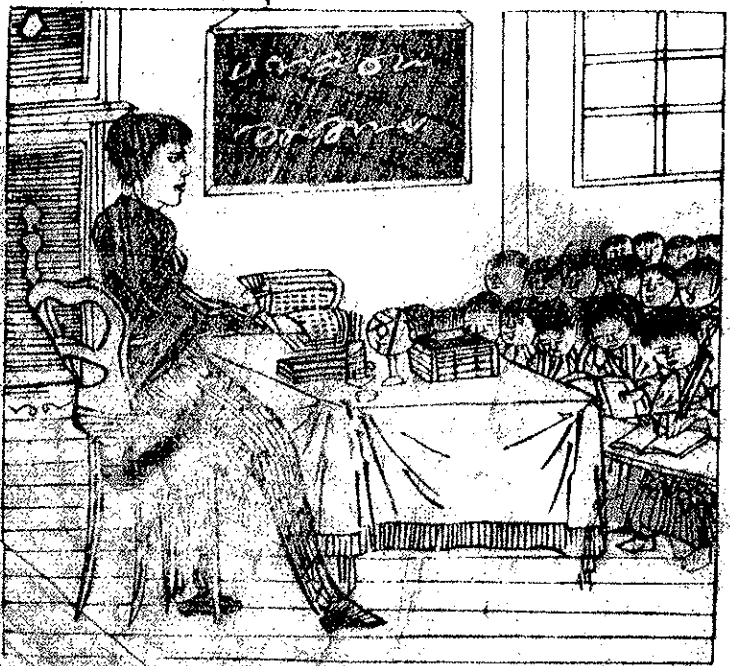


眠るゆゑなり、



とも生長して後の雪の如く、白くなるなり、この鳥の長き頸は、この鳥の卵を産むるに、此鳥の卵は、大よして白きものなり。○此類の鳥は、浅水と水鳥といへり、浅水と渉りて、魚蟲を食ふことなす、夜は樹上、

學校に教師入り来き、多数の男兒と小女子とあり。○此小兒等、皆書を讀み、字を習へり。○校中、石盤と机と書籍とあり。○汝は、學校に行くことを好む。○汝は、書を讀み、又語を綴ることを能くもや。○吾は、書を讀むことを好めども、未能く讀むことを得ず。



只遊歩場を於て遊ぶのみ



今日の寒さの日あり○雪の一樣は地上に積もる  
り○小兎の氷の上を  
べることを好む○此  
の甚危きものゆゑ命  
心を用るむゝなるべ  
らば○も一顛び倒る  
ことあららば身を傷ふ  
し○賢き小兎はかく  
危き遊を好むことなく

○巢の中よハ數多の卵あり○ときハ雞の卵あり○雞ハ巢の傍に在りて、飛び去らば、こまハ卵を取らるゝことを憂ふるゆゑなり○雞の卵は小なるものと大なるものとあるハ其種類の異なるあり

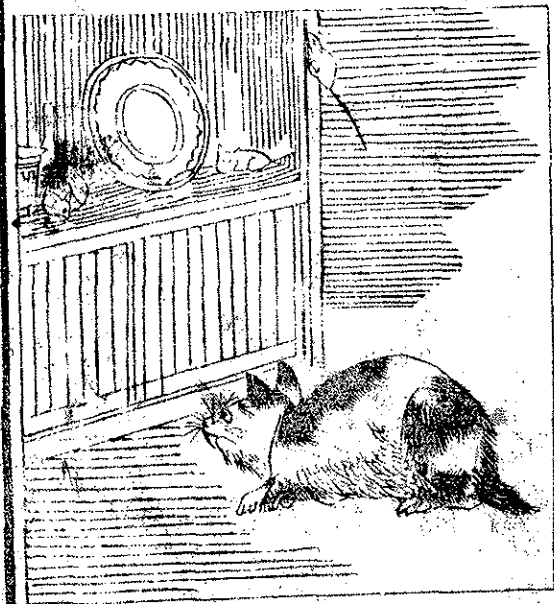


瞿麥と桔梗との花あり○小兎ハ桔梗の花り、娘ハ瞿麥の花を手は持てり○瞿麥の花



く紅色なり。○  
 花ハ紺色あり。○  
 多種あれども概  
 花を開くなり。

數多の鼠あり、鼠ハ日中  
 出づることあり。○夜  
 半に至りて、各出でて遊  
 ぶ。○此出でて遊ぶと  
 ころ、梁を行き、柵に登り、



厨入りて、食類を竊し食ふ。○然きとも猫の聲  
 を聞くと、まを驚きて一時は、柵より、忽穴の中へ



逃げ入るなり。○故は  
 猫の居る處より出で  
 て遊ぶことなり。○  
 爰は馬車ありて、數多  
 の小兒と女子とを載  
 せたり。○汝ハ、此小兒  
 と女子とを知り、○  
 ○これを知り、○

此の箱の中は響あり。○汝  
 の此響を何ありと思ふや  
 ○此箱の中は、あるは鼠を  
 らさる猫あるべし。汝は、何  
 ありと思ふや。○この響甚  
 小なるゆゑは、吾ハ小き鼠



ならと思へり。○凡て響の其物に應じて度は過  
 ぎざるものなれば、猫も何らば大なる鼠も  
 何らぞと思へり。  
 爰に四人の小兜あり。二  
 人坐して二人立てり。  
 一人の老人ありて、此小兜  
 等は神の話を説き聞きた  
 んとす。○老人云ふ、凡て人  
 を神を敬して、我身の幸を  
 願むとせむらば善き道

下巻  
 一  
 一  
 一

行ふべし。○善き心を持ちて善き道を行なふこと  
 とを欲せば、小兒の時より學問を勤むべし。○學  
 問して、壯年ふ至り、毫も過あまきとき、自神の助  
 を得べし。

爰に杖を携へたる老人の  
 り足も不自由よて目も朦  
 くらきなり、然きども此老人  
 も初ハ小兒よて今の汝等  
 の如く疾く走りまじ遊び  
 戯れしなり。○今の足も頼



まろくもよ小兒の肩に倚りて立てり。○見よ  
 此老人ハこれを一年ハ譬ふきハ冬の時候の至  
 きるなり。○汝等も冬の時候ふ至らざる前ハ學  
 問を勤めて世間の利益を考へ出だせハ春の萬  
 物を生長せらる如くせせハあるべからば  
 爰に親の大木あり。○汝ハ此木の年を経たる數  
 を知るる。○此木の年を経たる數を知らんこ  
 とを欲せば、横に切り  
 て、本理の輪を數へ見  
 るべし。○本理の輪ハ





年毎は一つの外の、生ぜざるものなれハ輪の數  
よて其經たる年の數を知らるゝなり



汝等毎朝早く起きて神を拜  
し先今朝まで無難は過ぎた  
るも神の賜おりかく夜明く  
る毎は日光を給ふよよりて  
父母の恙おま顔を見ること  
を得るも皆其恩ありと謝を

へし。○さて其後、吾を導きて幸と與へ必過無  
から志めんことを祈るべし

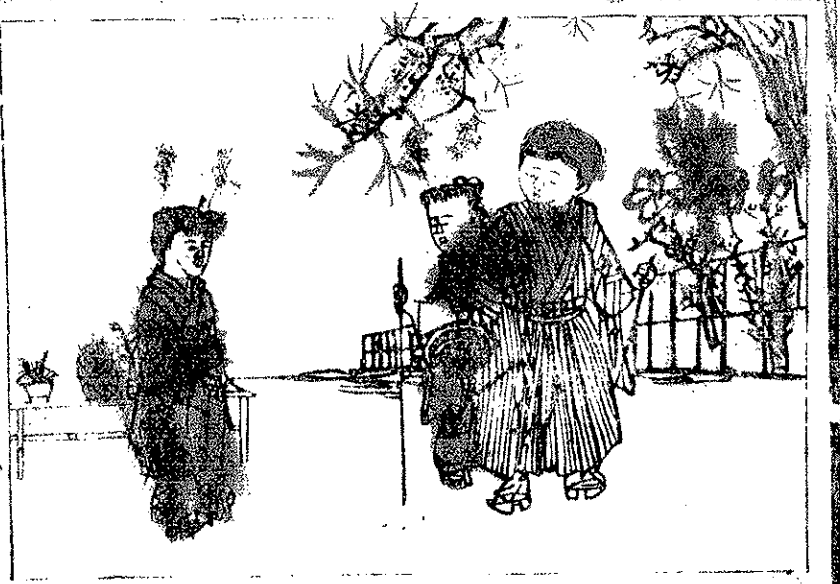
第六

此人等ハ小舟を乗り、網  
を以て魚を捕り、海濱に  
歸るなり。○網を海上  
より引きて魚を捕ふると  
まハ鱗あるも鱗なきも  
大あるも小あるも、同ト  
く其中より入らざるもの





あり。○汝ハ此處に居る三人の男を見たりや。○  
 又彼等の捕へたる數多の魚を見ればや。○海中の  
 魚ハ其種類多くして大なるものと小なるもの  
 と良きものと良からぬものとあり。○一人の男  
 ハ小なるも良からざる魚をば取りて海中へ  
 げ入きたり。○一人ハ大なる魚を籠に入ると  
 あり。○入きたる魚の此籠は満ちたるときは我  
 が家へ持ち歸るなり。  
 此地を何如なる處と思ふぞ。○花園あり。○此處  
 は數多の美しき花あり。○左の手は鐵を持ち右

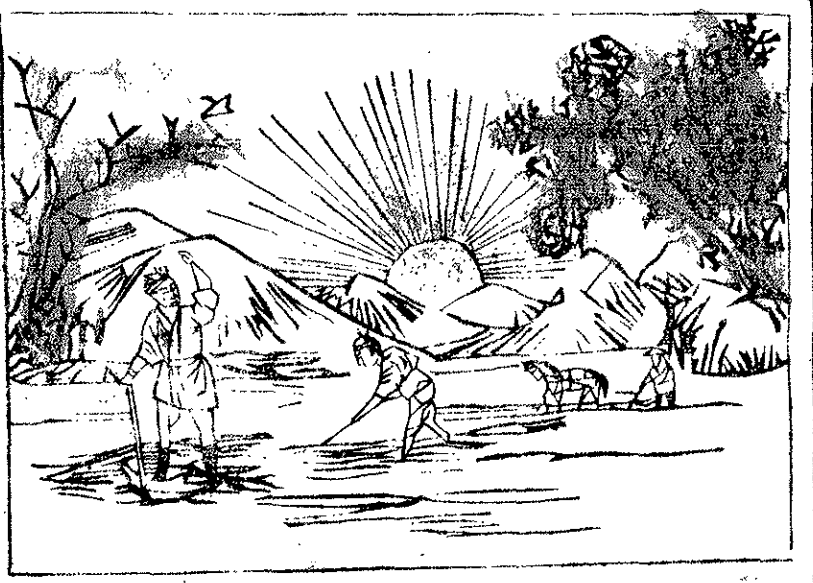
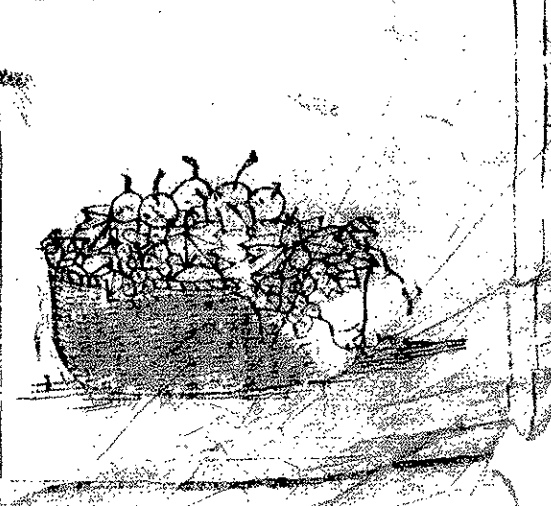


花を折り、又果を取るべからず。

の手は杖を持ちたる小兒  
 あり、小兒の後み杖を持ち  
 たる娘あり。○汝ハ此園と  
 此小兒と娘との為は設け  
 たる所ありと思ふか。○又  
 この小兒等ハ喜びを遊ぶ  
 と思ふか。○一人の娘ハ  
 を入きたる籠を持ちて  
 汝ハ花園を遊ぶこと

爰は果を摘み入きたる籠あり○この果は葡萄と梨なり○籠の外は掛りたる葡萄の蔓あり○其影は籠の左に在り然きは大陽の何きの方よりありといふことを知りや○大陽は籠の右よりあるべし

此畫は日の出の景色なり○今日の晴きたる天氣ゆゑは啼く鳥は木より飛び遷る○草は青々として葉も露を帯たり○數多の農夫は野



より出でて或は畠を耕し或は草を刈きり○農夫は晴きたる日よは必野より出て働くものと知るべし○晴天は働うさをぞ霖雨は遇ふとき耕むことを得べし

陽の照らひ處は甚熱し然きども樹の蔭は較涼

一きゆゑも臥したる牛と  
 立ちたる牛有り○又一匹  
 の牛ハ熱さを消せんぐ為  
 河へ行きて水を飲まん  
 とす○河の上は橋有り○  
 人々日中も有りたるゆゑ  
 晝飯を食する為家も  
 歸き  
 日暮も有りたり○人の野  
 より歸り来り牛を庭に



り○一人の女ハ庭に出  
 て牛の乳を齧り桶に満  
 一めてこれを牛酪に製せ  
 んとい○此時男子晝間  
 焚りたる草を積み又干  
 置ける穀を収めんぐ為  
 極めて忙ト今日もト務  
 果さざるとまハ明日の業  
 妨あるがゆゑ  
 神ハ常も我を守るゆゑ

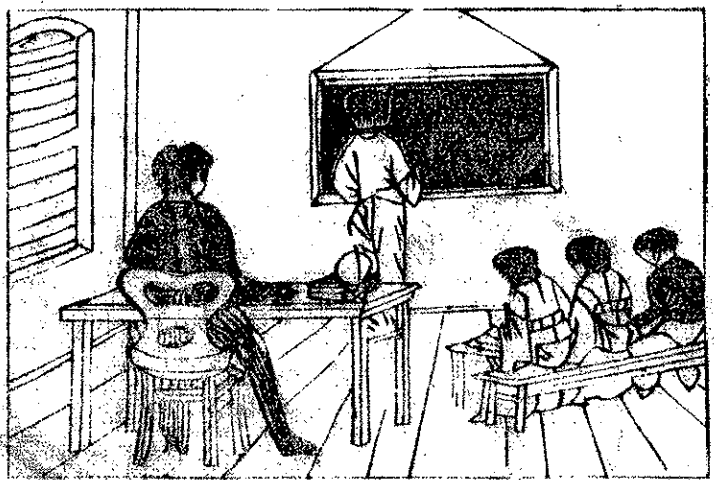
八  
 廿八



吾を獨もて、暗夜歩行するをも恐るることな  
 ー○又眠りたるときまも神  
 の守りあるゆゑは、暗き所も  
 恐るることなし○神ハ暗き  
 所も明き見るものゆゑ人の  
 知らざる所と思ひて、假も  
 惡しきことを考せば、怒罰と  
 蒙ふるあり○人の知らざる  
 ことを、神ハ能く知るゆゑは、善きものハ幸  
 を與へ惡しきものハ禍と與ふるなり

第七

汝ハ物を數へ得るゝ○父も  
 一、汝ハ十一の林檎を與へて、  
 母もまた五の林檎を與へ、  
 るときまた幾箇の林檎を得た  
 りと思ふや、○十六の林檎な  
 り○然り、汝等ハ物を數ふる  
 ことを學ぶべし○大なる數  
 と、小き數とを知るべし○汝  
 等、石盤又ハ紙に數字を書得るゝ○も、數字と



世九

書き得ずハ務めてこれを書くことを學ぶべし  
 ○物の數を知らざるハ愚人なり



盆の上ハ十一の梨ありこの中  
 母ハ三持ち去きり然らば残り  
 たる梨子ハ幾箇となきりや○  
 残りたるハハあり

汝等ハ文字を書き得るを  
 書き得るを○文字を書き  
 得ざるを○書状を入る贈  
 ること能はず○このゆゑ



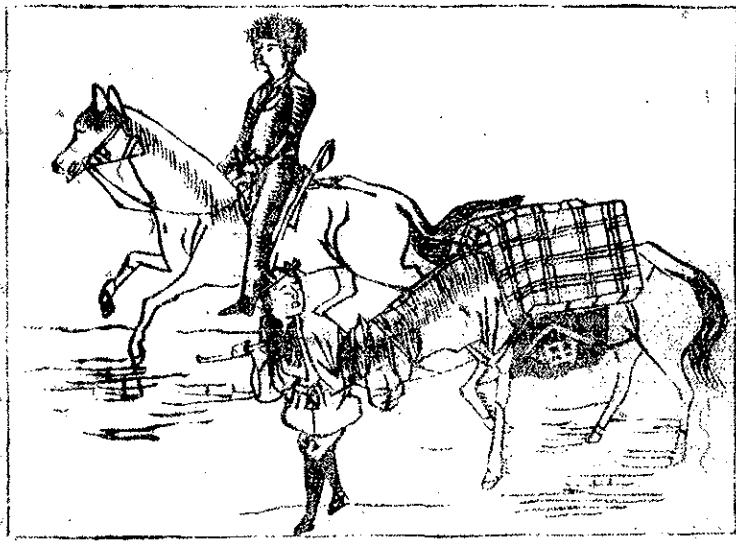
汝等ハ文字を書き得ることを學ぶべし



汝等ハ文字を讀み得るを  
 ○文字を讀むことを知ら  
 ざれば人より贈りたる書  
 状をも讀むこと能はず○  
 又書籍を讀み得ざるを  
 ○事を知らざる人ハ縦才  
 ありと雖用するハ適せざる  
 あり○ゆゑも文字を讀むこ



ひとと知らざる者と、同ドク愚人といふなり。○  
 れバ、汝等ハ務めて文字を讀むことを學ぶべし。  
 馬ハ實用ニ適スベキ畜類  
 あり、陸地ニ於て、荷物を運  
 ぶニ、馬無くてハ不便なり。  
 ○馬ハ、畜類の大なるもの  
 にて、顔長く鬣あり。○背の  
 上ニ荷を負ひて、遠きニ輸  
 るもあり、人を載せて速ニ  
 走るもあり、又車を引くも



あるあり、  
 牛も馬と同ドク實用ニ便なる畜類也。て能く  
 車を引く、又ハ荷を負  
 ひて遠きニ輸るもの  
 あり。○されども牛ハ  
 人を乗せて、走ること  
 能はず。○牛の肉ハ食  
 物とありて、能く滋養  
 をなす。又牝牛よりハ  
 乳汁を搾り取ること

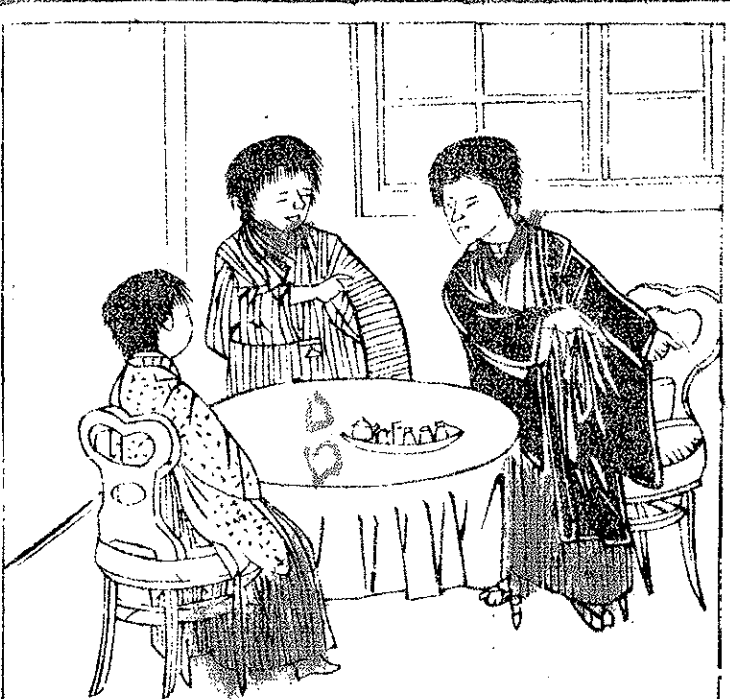


畜類ノ大ニシテ馬ハ第一ノ畜類ナリ  
 三十一



を得るなり

汝の著たる衣服ハ何といふ織物ありや○上衣



ハ糸織ト一て羽織ハ  
黒羅紗あり○汝ハ絹  
と木綿と羅紗の中ハ  
何きカ尤暖あるもの  
と思ふや○羅紗ハ毛  
織なきハ第一ハ暖か  
り其次と木綿とい絹  
も又其次なり

爰ハ白き單衣と紺色の單衣あり○汝ハ何きと  
暖なりと思ふや○白き  
色ハ太陽の熱を引くと  
と少きゆゑハ夏ハ涼  
と雖冬ハ寒ト○紺色ハ  
太陽の熱通ひ易きゆゑ  
ハ冬ハ暖ありと雖夏ハ  
暑ト○人々夏ハ多く白  
衣を著冬ハ多く紺色の  
衣裳を著るハこの理ハよりてあり





爰ふ二枚の圖あり皆人の働く状を畫けり。○初の圖ハ田々下がりて、秧を植るところあり。○この人ハ肘も脛も露をせり、これ働くまゝ便あるが由也

なり。

次の圖ハ稻を刈りて我家に持ち歸る所あり。



又稻を持ちて米を取る所を見るべし。○此の人々の衣ハ汗が濡ひて、乾くときふと。○農夫ハ此の如く

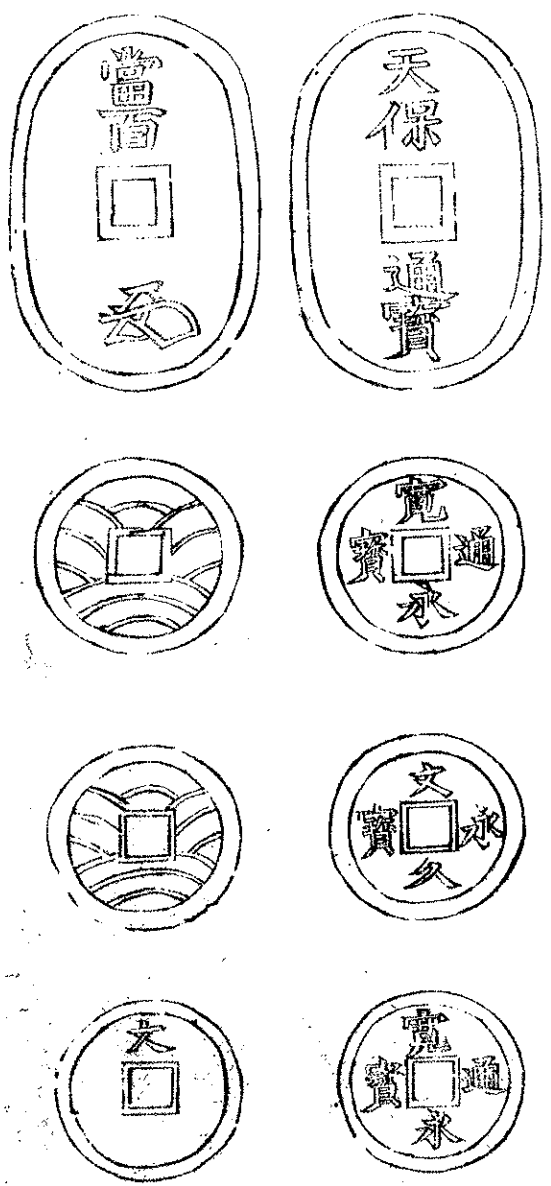
働らざれば穀物を得ることなし。○汝等穀物を食する毎ふ農夫の苦勞を想ひ、粒々皆辛苦より出でたるを、知りて其業を怠るべからず。

これの蠶を養ひ絲を繰る所なり。○數多の...



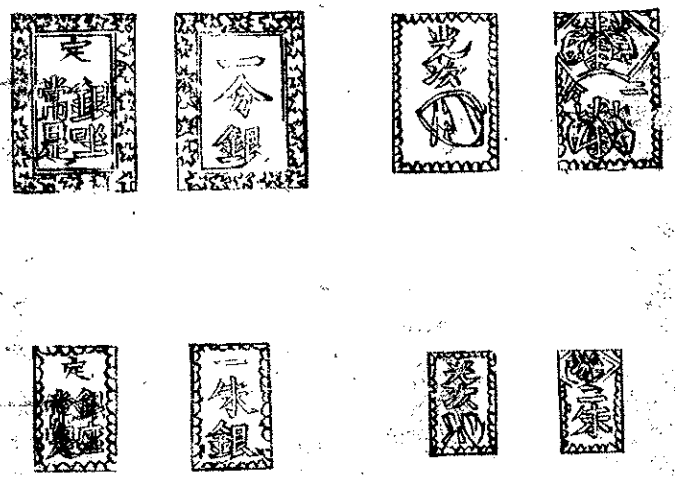
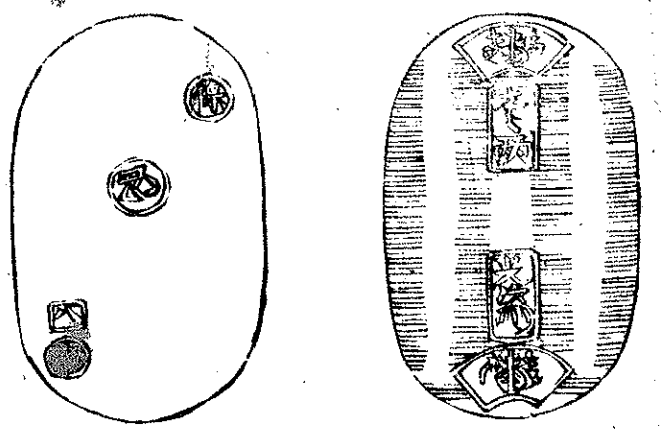
朝早く起き、夜中まで眠らざりて、髪も結をず、日々、息子間おく、働けり。○又二人の男あり、桑を採る所あり。○此男の野は出で、耕す人と同トく、肘も脛も露を、かど盡して、働けり。○此の如く、數多の男女の苦勞...

て製する、非ざれば、糸も生ぜず、絹も得ること能はば、汝等暖ある衣を著たると、よの必蠶を養ひ、絲を取る人々の苦勞を忘るべからば、爰は種々の貨幣あり

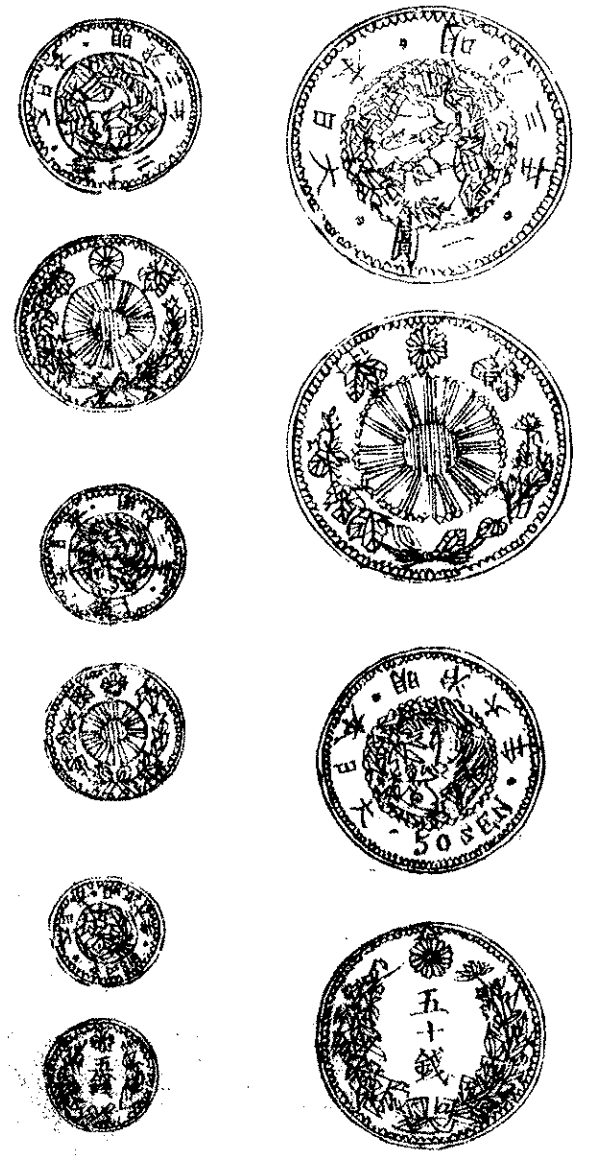


三十四

右四品の貨幣と錢といふ幕府政を執るときより今日までも通用するもの是なり

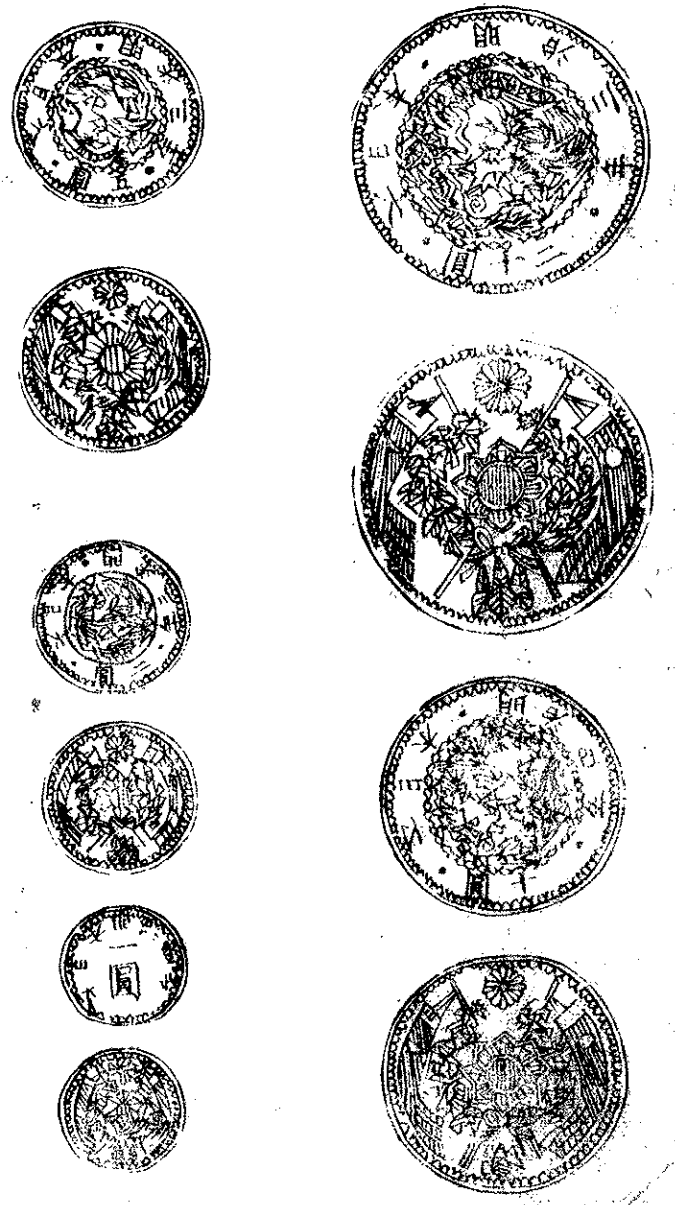


此五品の貨幣と金といふ幕府政を執るときより通用せしものなり

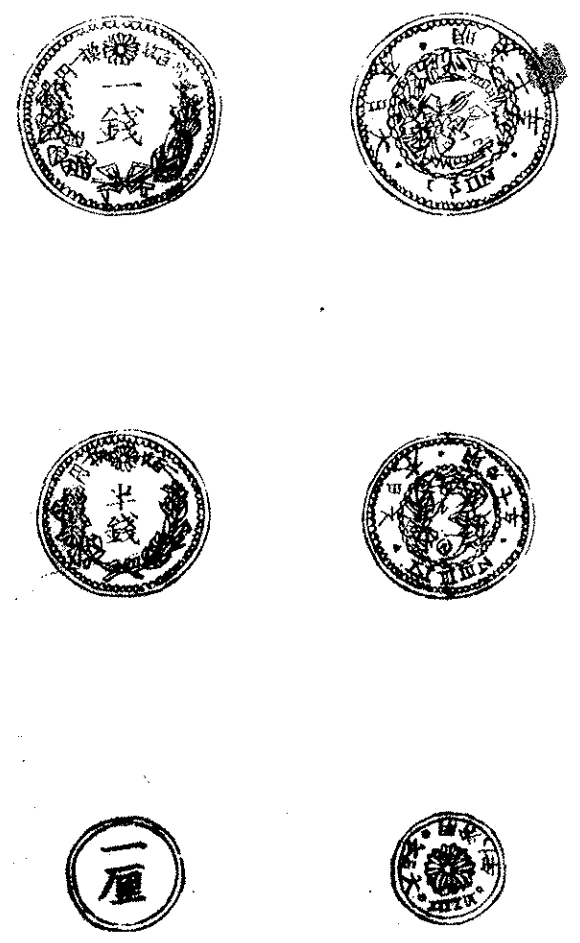


右五品の貨幣と銀貨幣と云ふ

右五品の化貨幣と金貨幣と云ふ



右三品を銅貨幣と云ふ  
 此三種の貨幣ハ朝廷の發行より當今の通用を





り、  
小銅錢一箇を五厘といひ、十厘を一錢といひ、百  
錢を一圓といふ故、十二錢半ハ金貳朱、一  
り、二十五錢を一分、五十五錢ハ二分、當  
たるなり、

小學讀本第一終

明治十六年九月廿八日 翻刻御届  
同 年十月出版

◆ 翻刻人

福岡縣士族

山

崎

登

福岡區福岡橋口町四十一番地